



# 伝染性紅斑病（りんご病）

名古屋市感染症情報センターの感染症発生動向調査情報によると、伝染性紅斑病の患者報告数が例年よりも多くなっているとのこと。

本市における患者報告数は5月13日～5月19日時点で0.61人/定点ですが、全国的に患者報告が増加しており、例年と比べて高い水準を維持しています。

今後、夏にかけて患者数が更に増加し、2015年以来4年ぶりの流行となることが予想されます。特に妊婦が感染すると流産の原因となることがありますので、注意が必要です。

伝染性紅斑病（りんご病）とは？

4～5歳を中心に幼児、学童に好発する感染症で、感染後10～20日で両頬にはっきりと紅斑ができます。

りんごのように赤くなることから「りんご病」とも呼ばれています。

続いて腕、脚の外側にレース様の紅斑ができることがあります。まれに体幹部（胸腹背部）に発疹が現れます。発熱はあっても軽度です。

この感染症は、身体に発疹ができ伝染性紅斑病と診断された時には、すでにウイルスはほとんどおらず、他者への感染はないといわれています。

成人の場合、両頬の紅斑は少ないですが、合併症である関節痛・関節炎の頻度が高く、男性では約30%、女性では約60%発症します。（小児では約10%以下）

妊婦が感染すると、胎児の異常（胎児水腫）や流産を起こす可能性があります。妊娠前半期は、より危険性が高いといわれていますが、後半期にも胎児感染は生じるとの報告があります。

感染経路と対策

感染経路は、飛沫感染もしくは接触感染です。

有効なワクチンはなく、ウイルス排泄時期に特徴的な症状が現れないため、日頃から手洗いや咳エチケットを心がけるようにしましょう！

